

2022 年度秋季 大阪大学言語文化学会 第 61 回大会

2022 年 10 月 27 日 (木) 於 大阪大学 豊中キャンパス

発表要旨

(語彙的)アスペクト複合動詞「V 上げる」の結合制約
— 「V 切る」との比較を通じて—
張 栩

本稿は、アスペクト的意味を表す「～上げる」の V1 として生起できる動詞とできない動詞はどのような意味特徴があるかを考察した上で、このような意味制約の要因を「上げる」の意味拡張プロセスと関連づけて解釈する。

日本語の語彙的複合動詞の中で、後項動詞 (V2) が広い意味でアスペクト的な意味を表し、前項動詞 (V1) の表す事象の展開の仕方 (開始・継続・完了・強調など) について述べるものがアスペクト複合動詞と呼ばれている (影山 2014 など)。その中、「V 上げる」は生産性の高い一例だといえるが、結合できない V1 も多い。例えば、「書き上げる」「洗い上げる」「数え上げる」などが容認される一方、「*食べ上げる」「*飲み上げる」「*思い上げる」「*走り上げる」などはコンテキストがなければ容認されない。語彙的複合動詞における結合制約については、影山 (1993) で提案され広く認められてきた「他動性調和の原則」がある。影山 (2014) では、アスペクト複合動詞においてこの制約は適用されないとしてはいるものの、彼のこの観察は「他動詞+他動詞」の組み合わせを排除するものではない。本発表では、それにも関わらず、「V 上げる」において、「*食べ上げる」「*飲み上げる」などが容認されないという事実注目し、項構造によって規定される制約とは別に存在すると考えられる意味的制約を明らかにしたい。この意味制約は「上げる」の上方向を表す基本義から由来するものであり、「上げる」の語彙意味情報としてその語彙概念構造や特質構造によって説明されるものだと考えている。

以上のように今回の発表では、「上げる」と「切る」の比較を通じて、「V 上げる」の結合制約やその要因を明確し、それらを反映できる意味記述を探っていきたい。

複合動詞「V1+込む」の使用制限と生産性に関する考察
— フレーム・コンストラクション的アプローチを用いて—
蘇 暁笛

「～込む」はさまざまな動詞と結合し、前項動詞の意味特徴、生起する構文、コンテキストによって、表す意味が異なる (入り込む、投げ込む、考え込む、など)。しかし、「V1+込む」の意味に関する先行研究が多く見られるのに対し、「V1+込む」の語形成における結合制限に関する研究はほとんどない。

日本語複合動詞用例データベース (開発版) を確認したところ、「走り込む」は容認されるのに対し、「歩く」と「込む」を組み合わせた「歩き込む」は容認されにくい。「煮込む」は問題なく

用いられるのに対し、「揚げる」と「込む」を組み合わせた「揚げ込む」は多少違和感があると思われる。「V1+込む」にはこのような容認度の差異がよく見られ、その語形成には何らかの制限が存在すると思われる。

日本語複合動詞の結合制限に関する説明するには、これまで様々な扱い方がされてきた。項構造に基づき、日本語の語彙的複合動詞の組み合わせを説明する「他動性調和の原則」(影山 1993)、前項動詞と後項動詞の主語が同一物を指さなければならない「主語一致の原則」(松本 1998、由本 1996)、前項動詞と後項動詞の語彙概念構造(LCS)の合成性による説明(由本 2005)などがある。しかしながら、これらのアプローチでは、「V1+込む」の使用制限をうまく説明しきれないところがあると考えられる。本稿はコンストラクション形態論とフレーム意味論2つの理論的枠組みを組み合わせたフレーム・コンストラクション的なアプローチを用いることにより、「V1+込む」には以上のような容認度の差異がどこから来たのか、いわゆる、「V1+込む」の使用制限と生産性について検討する。

英語の脚韻における不完全脚韻の音韻的分析 夏目琢磨

英詩において脚韻は、詩行末の音節において母音と尾子音の両方を揃える完全脚韻と、一方のみを揃える不完全脚韻とに大別できる。不完全脚韻のうち尾子音のみを揃えるものを子韻(consonance)という。子韻は詩行末の音節の母音を揃えないとはいえ、どのような母音の組でも許されるのではないことが先行研究により明らかになっている。Zwicky (1976) はロック音楽の歌詞に見られる不完全脚韻を調査し、子韻における母音の組はほとんどの例で異なる素性が一つのみであると主張する。例えば winds - ends に見られる /i/ - /ε/ という組では、母音の高さが異なるのみである。しかしながら、Zwicky (1976) では論中で用いられる「素性」がどのような体系を成しているかが不明確である。「素性」が弁別素性であるのか音声素性であるのかさえ定義されていない。加えて Zwicky (1976) は短母音しか扱っておらず、二重母音の子韻においてどのように使用されるかが明かされていない。本研究では Zwicky (1976) と類似の手法で、より明確に定義された素性体系を用いて子韻の音韻素性分析を行った。ケーススタディーの対象には 19 世紀後期の英国の詩人である Hopkins を選んだ。結果、子韻で許容される母音の組は、少数の例外を除いて、異なる弁別素性が 1 つ以下であるという規則に従うことが分かった。また二重母音が含まれる組では、二重母音の後部要素のみが制約を受けることが判明した。加えて曖昧母音ならびに /ε/ はどのような母音とでも組み合わせが可能であることが分かった。このように音韻的に類似した母音にのみが子韻として許されるのは、同じ音の繰り返しにより生じるリズム感といった脚韻の効果を、母音をずらすといってもなるべく損なわないようにするためであると考えられる。最後に、本研究の展望として子韻の母音に課せられる制約への詩人ごとの違いや、子韻は音韻的類似によるものか音声的類似によるものかなどについて軽く述べる。

霹靂布袋戲における「声」 語り手の権威性及び機能 謝 鉉騏

霹靂布袋戲シリーズ(以下は、霹靂布袋戲)は 1988 年に放映が開始された台湾のテレビ人形劇である。人形劇の中で、人形の動きの他、声は感情表現の極めて重要な媒介である。霹靂布袋戲における声は 2 種類にわけられる。すなわち、対話や独白を含めた登場人物の声と語り手の声であ

る。霹靂布袋戲ではかつて2種とも専属声優「黄文擇」一人のものであった。本発表では主に語り手に注目している。

呉明德は『臺灣布袋戲的表演叙事與審美』（2018）で、その「語り手は「信頼できる」権威的な語り手であり」「語ることはすべて真実で」と述べている。しかし、彼はしばしば意識的にせよ無意識的にせよ嘘をついている。つまり、完全に信頼できる語り手ではないと思われる。その語り手への信頼は彼の権威に由来し、その権威は物語世界内の全知の存在であることのみならず、台湾布袋戲の発展とも関係していると考えられる。

本発表では、霹靂布袋戲における語り手の権威と台湾布袋戲の発展との関係の検討を中心とする。また、その語り手の機能も注目する点である。現時点での仮説は以下のとおりである。

各時期の布袋戲はそれぞれ特徴があるが、時代の流れの中で演師の表現の自由度が大きくなったことにつれ、権威性も高まっていった。黄文擇は布袋戲家族出身であり、家系によるの権威性も持っていたに違いない。さらに、オリジナル脚本に従いとは言え、霹靂布袋戲（シリーズ名）＝「黄文擇布袋戲」（劇団名）であるため、権威は当然ながら脚本家ではなく黄文擇にあると考えられる。

蔡芝蘭は「論霹靂布袋戲之口白表演藝術」（2009）において、霹靂布袋戲の語り手は内容の補足、臨場感の創出、各話の収束という、大きく3つの機能があると指摘している。だが、この他にも予告と人物の評価という機能もあるだろう。前者は語り手の権威を強固するものであり、後者はその権威によって生産されたものであると考えられる。

日本語教室における学生の自己開示の傾向について —教室発言数と自己開示の自己・他者評価を中心に— 李 眞善

近年、日本語教育では、学習者が自身のことを日本語で書いたり、話したりすること、つまり、「自己表現」することが、日本語の習得のほか、学習者の人間的な成長にもつながるとされ、教育方法として期待されるようになった。本研究では、「自己表現」より限定的な概念の「自己開示」に注目し、自己開示の傾向および特質を分析しようとした。

臨床心理学者のジュラード（Jourard, 1971）により提唱された「自己開示」は、心理学の多くの研究により、人間の精神と対人関係の面で重要性を持つとされている。以降、教育場面においても研究されるようになり、友人関係や学習意欲、ライフスキルの獲得でも有効であることが明らかになった。しかし、日本語教育においては、「自己開示」についてあまり研究が行われていない。

本研究では、1) 自己開示の度合いは、開示する内容や相手によって変化するのか。2) 普段の生活における自己開示の度合いと、教室での自発的な発言数が、直接的に関係しているのか。3) 教室における自己開示の度合いについて、自己評価と他者評価の間に差があるのか。を明らかにするために、中級日本語教室の留学生7名（スペイン3名、韓国2名、ドイツ1名、フランス1名）を対象に、2021年4月14日から2021年7月28日まで、参与観察、アンケート調査（JSDQ-40）、そして、インタビュー調査（5名）を実施した。

研究の結果、1) 自分や自分の家族の悪い面および弱点になるような面は他人に開示しようとする傾向が見られた。また、相手との心理的距離が近いほど自己開示の度合いが広く、深くなる傾向が見られた。2) 発言数と自己開示の度合いには、明確な相関関係が見られなかった。3) 自己開示の度合いに対して、自己評価と他者評価とで大きな差が見られた。